

最近、夏に出るキノコが変です。猛暑の一言で片付けることができないほど、夏のキノコが見当たりません。猛暑だけが原因ならタイミングがずれて出てくることもあります。季節外れのキノコも目にする機会がほとんどないほどです。要因の一つとして、6月の梅雨の雨量が極端に少なく、高温注意報が出るような気温となったことや梅雨明け後のゲリラ的な豪雨があたりと「日本の四季」が崩れてきていることがあると思います。地球温暖化が叫ばれてから年月が経ち、様々な取組が進められていますが、温暖化は進行していると思われます。



ドクベニタケ

「ドクベニタケ」は、有名な毒キノコですが、カシなどのドングリを実らせる木と共生関係を築いて木を育てる菌根菌類(きんこんきんるい)に分類されます。梅雨の終わりが近づくと出てくるキノコで、夏の到来を感じさせるキノコだと思っています。残念ながら、去年も、今年も目にしていません。



ウスタケ

「ウスタケ」は、食毒性は低いと言われていますが、毒キノコに分類されています。モミなどの針葉樹と共生する菌根菌類です。もともと頻繁には見れませんが、このところまったく目にしません。

「コテングダケモドキ」は、有名な毒キノコのテングダケの仲間です。ドクベニタケとウスタケ同様に菌根菌類で、シイ、カシ、コナラなどと共生するキノコです。例年、コナラ林で、普通に見れましたが、今年はまだ目にしていません。



コテングダケ
モドキ





夏のキノコが消えた！？



ケショウハツ

左はハツタケの仲間の「ケショウハツ」です。針葉樹や広葉樹の林床に発生する菌根菌類です。今年は目にしていません。

左下は「キクバナイグチ」で、市内での数はあまり多くありません。カシやコナラと共生する菌根菌類で、食用にもなります。

右下は、イグチ類の仲間の「ミヤマベニイグチ」です。食毒不明の菌根菌類で、カシやコナラと共生します。



キクバナイグチ



ミヤマベニイグチ

菌根菌は

キノコは、その生活パターンから2種類に分けることができます。一つは、樹木と共生関係をつくる菌類の菌根菌です。土の中で菌糸を伸ばしてミネラルを集め、根に養分を供給する代わりに樹木が光合成で作った炭水化物をもらって生きています。

もう一つは、腐生菌（ふせいきん）です。林床の落ち葉や枯れ木を分解し、養分を吸収して生きています。有機物の分解により、森林土壌を作ることにもなります。

どちらのキノコも森の中で重要な役割を担っています。

暑い夏は

夏のキノコが見えないことが続いています。キノコの本体は菌糸なので土中や枯れ木などの中で生きています。しかし、地上に出るキノコ（子実体）で胞子を飛ばさなければ子孫を残せないため、地上に出るキノコ（子実体）も重要です。

梅雨の降雨パターンの変化や梅雨明け後の経験したことのない災害を伴う豪雨（ゲリラ豪雨など）、地球温暖化と言われる猛暑などがありましたが、私たちの生活は「気候変動」の中にあります。その気候変動は、私たちの目に見えないところでも大きな影響を与えることがあります。森の中の木を育てる小さな菌類にもそれが表れているようです。このまま菌類の力を借りることができなかつたら、木々の成長はどうなるのか。もしかしたら、森の中で次々と木々が枯れていくかもしれません。たかがキノコ、されどキノコと思っています。